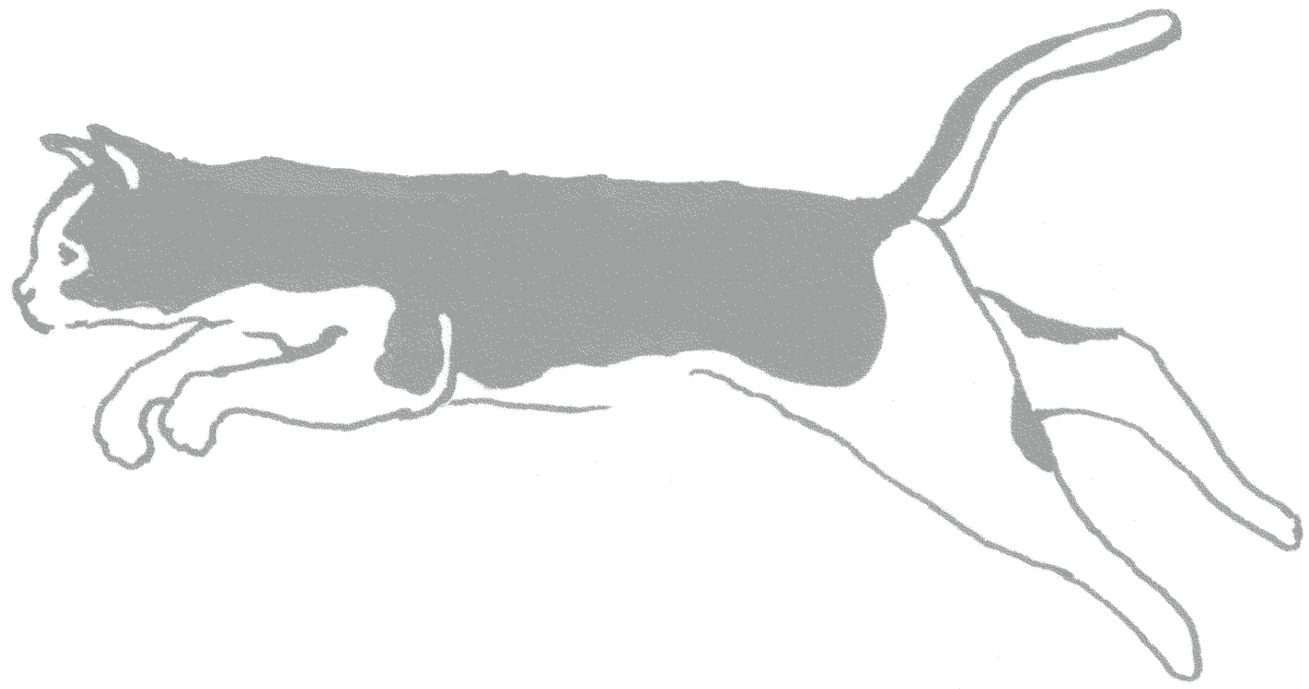


試し読み

転校生

知古文庫

当ファイルを許可無く印刷またはインターネットを介して
第三者へ配布することを禁じます。

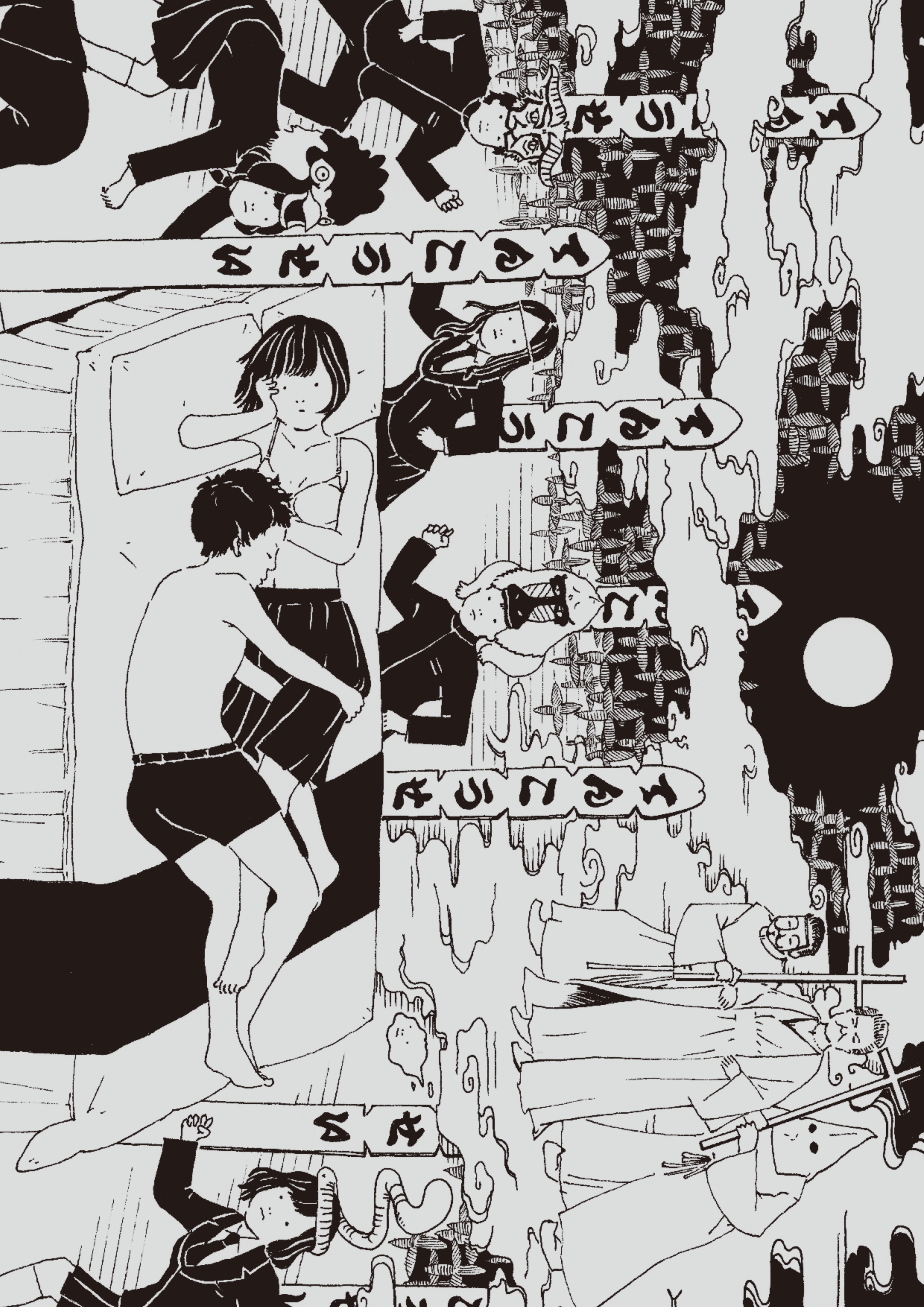
試し読み

Copyright © 2017 ChicoBunko All Rights Reserved

転校生

てんこうせい

作 いかるがつみき


ドン
ドン
ドン
ドン
ドン
ドン
ドン
ドン
ドン
ドン

転校生

私にとって、唯一の存在であるカレのことをスキになるのは、当然というか必然というか、素直というか安直というか……考えてみれば、選択肢が多ければ迷いもするものだけど、すくなければ迷う必要がないのだ。だから、

「どうしてオレなの？」

なんて訊かれたところで、すぐに好感の持てる応えが浮かばなかった。

「あなたしかいないから」

って云えば、あなたが唯一の存在で、その唯一っていうのは、世界中のだれより一番って意味で受けとってもらえばいいし、本当は、あなたが私と話をしてくれる唯一の人間だってことなんだけど、こう云っておけば、カレにも自分にも嘘をつかないことばのチョイスだろうと思って、なんとか（我ながら結構巧みな回答をひねり出したと思ったが）返した。

「でも、オレ、ぶっちゃけゲイだよ」

そしたら、斜め上いく返しがきたものだから、相手を逆手に取ったり、隙をついたりして、

さらに追いこみをかけようかと、どんな恋の駆け引きを繰りひろげてやろうかと構えていた私の心は、あえなくひるんでしまった。

「あ、そうなんだ」

「ま、いちおう両方だいじょうぶってことにしてるんだけど」

「へえ……」

私は孤独だった。

中学生の頃までは、ふつうに過ごしていた。いや、もともと幼稚園のころから、いや、生まれたときから私はちょっとアレなこどもだったのかもしれない。集団生活のなかで（というか一対一でも）人間関係を築くのが得意でなかった。小学、中学というのは、だいたい、その地域のなかのある一定の限られたコミュニティで形成されている。私の住んでいるような住宅地では、ことのほか近所との繋がりが強い。だから、私が生まれるまえから、父親・母親のまわりに、自治会、商工会、婦人会、青年団やら、もろもろ確立されていて、同年代のこどもたちは、近所に住んでいるからというだけで、その組織に組みこまれ、グループの一員にされ、あ

まつさえ「こどもはみんな友だち」だよねといった、（こどもたちからすると空気の読めない）人間平等精神のなかに放りこまれた。性格を認めあっているわけでもないのに、歳が近いというだけで、しぜんに仲間と見做され、遊びにいかされたりした。かったるい友だち関係ではあったものの、そのせいもあってか、ひとりきりになるということはなかった。

私の友情関係は、能動的に活動していなかった。ただ家が近いから、クラスがおなじだからくらいの弱い繋がりで形成されていた。私はそれに気づかずにいた。寂しさの穴埋めだけの関係、それ以上に信頼とか、共有とか、きずなを深めるようなことをしてこなかった。というよりも、そんなことが必要かどうかに気づきもしなかったのだ。人間なんて、そこかしこに溢れているのだから、友情なんていうものは顔を合わせているだけで、しぜんと湧いてくるようなものだと思っていた。私はみずから他人とふれあう努力をしたことがなかった。

高校はちょっと家から遠いところにした。理由は、私にちょうどいい学力の高校がたまたまそこにあったというだけだった。いままで当たり障りのない会話で、かろうじて友人ヅラをしていた同級生はことごとく別の学校へ進学していった。

コミュニティからすこし外れてしまえば、私にはだれひとりいない。私は、ひとりきりの高校デビューになった。

そして失敗した。間違いを起こしたわけではない。単純にそのときの運が悪かった。うまく

クラスになじめなかった。あたらしい環境に緊張しきっていて、なんとなくぎこちない会話しかできなかった私は、４月の終わりには、「なんとなく話しづらい子」が定着して、そのままズルズルと年度末まで引きずってしまった。なにがいけなかったのだろう。たいしておもしろくないにしても、まがりなりにもそれなりに当たり障りのない会話ならできたであろう私。間の取りかたが悪かったのか、会話を返すタイミングがワンテンポ遅れていたのだろうか、変な顔をしていたのだろうか、口が臭かったのだろうか。ゆっくりと相手の話を聞いて、しっかり応える落ち着きのあるスタンスでいたはずだが、どこかまどろっこしかったのだろうか。それとも、あえてだれの気持ちも忖度せず、ざっくばらんにズケズケ話ができるズケキャラとして推していったほうが、かえってよかったのだろうか。素直な、ありのままの自分をさらけ出して、自然体のまま受けとめてもらえばよかったのだろうか。……いやいや、ただ運が悪かっただけだ、私はなにも悪くない、ほんのすこし掛け違いが起こっただけだ。こんな経験、ほんの人生のひととき。あとから思いおこせば笑い話になるようなことで、そもそもこの広い宇宙からみれば私の悩みなどとるに足らないちっぽけな存在でしかないのだ。そうだ、いっそ宇宙からきた宇宙人キャラでツインテールとかにしてみるのも悪くない。魔法を使って、突きぬけてしまったほうが、ある意味いさぎよい（だけど、声が低い私に、そのキャラクターを貫くのはむずかしいか）……そんな煩悶をグルグル繰りかえしながら、２年目の春。今年は失敗すまいと、

ガチガチに緊張していた私は、当然のごとくおなじ轍を踏み、「なんとなく話しづらい子」というキャラを更新してしまった。

決していじめられていたわけではない。ただ私という存在がそこに存在しないかのようにふるまわれていただけだ。話しかけられたら話すし、事務的なことだったら、まあ、それなりの当たり障りなさで連絡が回ってくる。ただ、なんとなく、向きあった相手が、早く話を切りあげようとしている感じはみてとれた。

だから、カレが転校してきて、最初に話しかけたのが私だったとき、まわりのクラスメートたちは、「あ、そこいく？」って顔でこちらをみていたのがわかった。カレからすれば、まったく地方もことばの訛りも違う学校に転校することになって、たまたま近くにいたのが私で、外見がヤンキーっぽくもなく、ヤバすぎもなく、質問したことにたいして無難な回答くらいはしてれるだろうという、そつない外見をしていただけのことだった。

「風邪ひいてるの？　顔赤いよ」

だけど私にしてみれば、やむにやまれず1年以上閉ざしていた心に、突然フランクに入りこんでこられたものだから、それも異性だし、なんだか結構このみの顔立ちだったし、ホレもするじゃないか、求めもするじゃないか、毎晩カレのことを妄想したりもするじゃないか。

カレは人好きする性格なのだ。私が特別どうこういうわけじゃなくて、クラス全員、性別か

かわらず、まんべんなく仲良くしていた。あとからクラスに入ってきたためもあるだろうが、とくにどの派閥に偏るというわけでもなく、だれともうまくつきあっているようだった。

あえて繰りかえす。私は決していじめられていたわけじゃない。（いじめる側が悪いだけじゃない、いじめられる側にも問題があるという説もあるが）いわゆる、いじめられる側の典型の、不細工、太っている、オタクのどれにもあてはまらない。小学生のときにちょっと空手を習っていたので、肉体的に弱いわけでもない。「なんとなく話しづらい子」なのだ。だから、話しかけてくれさえすれば、昨日みたテレビの話とか、最近の音楽の話だとか、先生の悪口だとか、ふつうに話せるんだ。だいたい、カレとはそれなりに良好な関係を築けていたのだのだし。

だけど、私と話さなくても、カレには友だちなんていっぱいいたはずなんだ。あえて私なんかと仲良くしなくてもよかったはずなんだ。それなのに、いままでずっと、最初に会ったときと変わらない態度で接してくれた。

私は文庫本を読んでいた。この本がおもしろいかどうかというのは問題でなくて、休み時間に話す相手がいないのってヒトとしてかわいそうだよねっていうのが女子社会にとって暗黙の

通念なので、ソレを回避するために文学少女気取って、ワザと垢抜けない感じのクラシックな雰囲気をかもしてみたりして、そのジャンルでは若干オシャレだよねってのを気取る感じで必死の抵抗、というか、友だちいなくても大丈夫ですよってクールでニヒルなスタンスを、その文庫本というアイテムを持つことで演じてみせて、昼休みのヒマな、けだるい時間の孤独をやりすごしていた。

教室で机を並べてキャアキャアお弁当を食べている同級生女子たちが話している恋バナが（変わりばえもしないし聴きたくもないのに）高い周波数を出していたものだから、文庫本のバリアーを貫いて私の耳に入ってきた。……カレのこと。

カレったら、なんであんなに、男・女、いけてるグループ・いけてないグループ分け隔てなく仲良くしているくせに、だれともそういった色恋チョメった関係になっていないのだろうか、と。カレはやさしい（同感）、気が利くし（同感）、顔も中の上か、上の下か（同感）で、とくに欠点なんてみつからない（同感）。同級生の超カッコイイけど性格ゲロ男（仮名）とか、超金持ちだけど顔ドロ男（仮名）とかの是非については、そのあまりあるマイナス面にどう目をつぶって利益を手にするかの打算が必要とされるけれど、逆に、どの分野においても落第点がみつからないカレなら、芸術点がつかないにしろ、むしろ総合得点によって高得点をはじきだしているという事実は、恋を夢見る女子高生各位にとって明白だった。きっと、カレには意中のひ

とがいるのだろうと。それも、だれにも悟られないように、大事にしている相手なんじゃないかと……ヒソヒソ声でもばっちり聞こえる黄色い怪電波で話していたものだから、私はソワソワしだしてしまった。

カレが私のことをスキなのではないかという蒙昧な回答を導きだしたのは、それからほどなく。というのも、カレはことのほか私にやさしくしてくれていた（ように感じていた）。私以外にも、男女とわずたくさん友だちがいるのに、コンスタントに私と話す時間をつくってくれていた（ように感じていた）。それも、私とは落ちついて、ゆっくり、じっくり話をしてくれていた（ように感じていた）。ほかの友だちとは、ノリとか、テンションとかで、とりあえずたのしそうなことを話しているけど、私とはささいな悩みごと、将来のこと、真面目な話もしてくれていた（ように感じていた）。校内とか、駅の近くのバーガーショップとかで、私みたいなさえない女とふたりでいるところをクラスのひとにみられでもしたら、恥ずかしかっただろう。なのに、カレはことあるごとに私を誘ってくれていた（ように感じていた）。そんなわけで、カレが私のことをスキなんじゃないかという妄想を企てたとしても、私にはなんの非もない。むしろ、やさしくするほうが罪なのだ（え、どの立場から云ってるの）。

それで、私は夏休みに入る直前、清水の舞台からバンジーなしのつもりで、カレに告白した。

「トモ、大切な友だちだと思ってるんだよね」

そして、やさしさという名の、むしろ傷つくセリフ集がはじまったわけだ。
「一緒にいてラクだし」
つまり、おまえじゃトキメかない。
「なんでも話せるし」
つまり、おまえを異性（いや、むしろ異性か）としてみていない。
「大事な関係だと思ってるんだよね」
だから、心の深いとこまでは突っこみあわないようにしようってか、壊れやすい花瓶はむしろ近づかないでそっとしておくほうが一番安全か。
「だからゴメン、オレよりもっといいひとがいるはずだよ」
ええい、黙れ。私はおまえのことを思って、夜な夜な妄想に妄想を掻き重ねているというのに、いまさら傷つけあいもしないソフトで健全な異性交遊を求めて告白したわけじゃないことくらい理解できるだろう、うすらイノセンスめ！
……しかし、ゲイとは。
私の喪失感はあきらめのような形で終わった。それじゃしようがない。